



SMF Press

アイデアを編む・石を置く・光を紡ぐ—SMFの周辺から

建築は技術だと僕は思っている。しかし肩書きを建築家としたからには、設計したモノがアートになればと願うのは人情だろう。

「技術」はどうすれば「アート」になるのか、そのヒントとなる譬え話がある。一昨年、入間市博物館で方丈庵のプロジェクトを展開したときに、亡くなられた安井清さんと共に、臨機応変の囲いを造る監修をして下さった建築家内田祥哉さんの論考である。

「科学者がコレはできると証明し、技術者はソレを実際につくってみせる。そのつくりかたをいろいろと試みた芸術家によって技術は洗練される」と、こんな粗筋である。

これは日常や既成にそれまでなかったヘンテコなものを差し込もうとする現代的なアートの在り方とは異なり、谷川徹三を気取れば、縄文的原型に対する弥生的原型に近い。僕は建築がアートに近づくのはこの手ではないかと思っている。技術には目的があり、機能や性能が要求される。だからそれを口実に縄文的原型は小手先だけのアートもときに陥り

アートの井戸端



▲アート井戸端かいぎ

やすいからだ。まちはそうした建物が溢れているし、僕もつくってきたという反省がある。

では建築は本当にアートになることができるのだろうか。昨秋のSMF Press vol.6、M.N.さんは、文化芸術振興基本法が制定された現在でも実情はアート氷河期と言われた以前となら変わっていないことを嘆き、だからこそ状況の打破にSMFは第2ステージへ向かうのだと、抱負を語っていた。しかし建築家の立場はさらに深刻だ。なにしろその基本法でも、

建築は文化や芸術の定義の中にはないものである。むしろ、新しい建築はそれらの邪魔にならないように造りましょう、とまで言われている。これでは建築文化は化石資源と同じではないか。これから僕たちがつくる建築も、それをアートとして次代に伝える価値あるものにし、その可能性を認めてもらいたい。

イタリアでは憲法に文化の推進と記念物の保護を謳い、韓国では未来に継承される文化遺産として建築を位置づけている。なのにこの国の

建築基準法では、土地に定着する工作物のうち屋根および柱か壁を有するもの、それが建築物なのである。

と、こんな愚痴を聞いてもらえるのも「アート井戸端かいぎ」だからこそ。この「かいぎ」、埼玉県立近代美術館などで開催している。僕は建築だが、美術、音楽、文学、舞踏、デザイン、写真、ここに集まる仲間の分野は多彩だ。だから話題も多岐に亘り面白い。ヘンテコなことをする連中かもし

S A I T A M A 連携美術館情報

2010年度はうらわ美術館が開館10周年、2011年度は川口市のアトリアが5周年で、それぞれ意欲的な記念展や活動が行われました。2012年度は、MOMASが30周年、川越市立美術館が10周年を迎えます。MOMASでは4月の草間彌生展にはじまり、ウルトラマン・アート、1968-82展、ベン・シャーン、ポール・デルヴォーと強力なラインアップで30周年を祝う予定です。MOMASコレクションでも、第2～3期を中心にコレクションのエッセンスを総ざらいし、MOMASファンのみならずにも参加していただいで一緒に楽しむ企画を計画中、MOMASの扉でもスペシャルがあります。どうぞご最良に何度も遊びに来てください。

川越では、コレクション展、タッチアート展をはじめ、喜多院「職人尽絵」や仙波東照宮「三十六歌仙額」を展示する小江戸川越江戸絵画展など、川越の至宝を紹介する展覧会が計画されているそうです。あわせて美術館の市民ギャラリーを使って市民とともに10周年を祝うイベントの企画も構想中とか。晩秋の川越も見逃せません。

入間市のアリットは2014年度の開館20周年に向けて、さらに充実蓄積を図る年でしょう。

うらわ美術館やアトリアでも、地域とミュージアムを結ぶ企画が出されています。今年もミュージアムを拠点に、身近な場所でアートを楽しむ機会をたくさん創っていきたいですね。(M.N.)

れないが、異分野で理解を深めようと、アート寺子屋なども計画する案外まともな仲間でもある。どうだろう、一度覗きに立ち寄られてみては。

さてこれからは追伸、附録である。

今年度のSMFのテーマは「つながる」だったが、僕にはまちの住宅地をペDESTリアンデッキのような街路でつないでみたいという夢がある。

実験集合住宅で立体町家を作るプロジェクトに参加したことがあるが、その立体街路を戸建ての住宅地に移し、平面的な集住体を考えてみたいのだ。かつての路地は基準法で車の通り道に召し上げられてしまったので、しっかりした構造の立体街路をインフラとして造り、階上に路地を取り戻し、そこで町家にあった軒先の縁台のような機能を再現する。上からのアクセスは住まいの間取りを豊富にし、地震でも立体街路が支えとなって、道路へ家屋が倒壊するのを防ぐ。と、いいことづくめなので、いつか井戸端に晒してみたい思いつきである。(K.M.)

建築とアート

行田とアートと人について

行田は埼玉県北部にある人口約85,000人の市です。古くは日本一の足袋の生産地として知られ、また最近では近く映画も公開される時代小説「のぼうの城」の舞台としても知られるようになりました。

僕はこのまちに生まれ、このまちで育ってきました。昔はただ何となくここにいましたが、今は自分はここにいたいとはっきり思いながらここにいます。

僕にそう思わせるのは、このまちやその周辺にいる素敵な人たちの存在です。こころの風景や空気感も好きですが、僕にとってはやはり彼女らがいるということが、僕がここにいたいと思う一番の理由です。

近年は各地で頻繁に地域再生のためのアートプロジェクトが行われています。

このまちも衰退が顕著なまちの例外ではないこと、僕自身が表現活動を行っていることを考えれば、このまちでもアートプロジェクトを、と考えるのは自然なことです。しかし同時にそれは、すでにかなりの資本と時間と労力を費やしながらか、それに見合った成果が現れることはごくごく稀であるということが既知となったプログラムを、それと知りながら借用するという、創造性のない選択にもなりかねません。

美術館の目的が美術作品を収蔵したり展示したりすることに留まらないのと同じように、このまちでアートをやることそれ自体が目的ではないのです。僕がこのまちにいたいと思う最大の根拠は、近くにいる人間たちの存在です。彼女らと共有すべきものはアートだけではないはず。アートという変幻自在の磁石を、よく見ればそこかしこにあるこのまちの隙間に、少しずつ置いていけば、きっとそれが素敵な出会いを引き当ててくれると思います。

長いこと磁石に触れているとそれ自身に磁力がなかった物質も自然に小さな

磁力をまとったりします。何と何がくっつくかは予測不能です。だんだんと数が増えて、大きな磁場が生まれることもあるかもしれないし、逆に反発しあって小さな点をたくさん作るかもしれません。どんな形



▲本町のパン屋「翠玉堂」。行田の異文化交流拠点。

になるかは重要ではありません。どう動かすかが大切なことです。僕がやるべきことは、ゆっくり歩きながらこの町の隙間を探し、一つ一つ丁寧に、その小さな石を置いていくことです。(S.N.)



▲市街地を出ると田んぼが広がっています。田植えの時期には海みたいになります。



▲僕です。パフォーマンス中は格好つけています。

コレオグラファーの目 vol.9

青の世界のフォトグラム、光を紡ぐムーブメント

2012年2月3、4日、SMFの協力委員をしている美術家・浅見俊哉さんと、若手及び中堅舞踊家たちによるコラボレーション「コレオグラファーの目vol.9 ～青の世界のフォトグラム、光を紡ぐムーブメント～」が、彩の国さいたま芸術劇場1階情報プラザにおいて開催されました。

情報プラザ中心にあるガラス張りの吹き抜けは、屋内外の光を複雑に反射して美しく、その空間自体からもテーマが醸し出されます。「光・交わり・ぽっかり空いた間」などが、私に受け取れるテーマでしょうか。舞台芸術を観に来る観客は、

演目からだけでなく、建物が所有するこのような空間からも、知らず知らず緊張の糸を解されていくのだと思います。

さて、この空間を更に際立たせたのが浅見さんと舞踊家とのコラボレーションでした。3日「ムーブメントとフォトグラム(青の世界)」では、ダンサーの等身大ポーズのフォトグラム作品を事前に制作し、それら12点を吹き抜け円周に吊るして踊る、というものでした。上演された中でも「原風景」というダンス作品は、フォトグラムを通して見え隠れする様々な記憶を観客と共に辿るというような、はかなくて美しい作品

に仕上がって、観客を魅了していました。

一方、4日「電飾ムーブメントは何を語るか?」では、電飾を体に巻きつけたダンサーが作品を上演し、その電飾の動きを写真に起こして、観客の目の記憶を辿るというものでした。

電飾を付けたダンスを観る面白さに加えて、空間と光のコラボレーションも美しく、また、浅見さん撮影の写真作品が、各々のダンス作品の本質を捉えていることや、瞬間でなく継続した時間を捉えているということに驚きを感じました。

SMFで知り合ったアーティスト同士が

様々な実験を試み、人々の心や考えを覆すような楽しい瞬間を、これからも作っていったらいいな、と思う2日間でした。(K.F.)

「コレオグラファーの眼」 コラボの感想

今回「コレオグラファーの眼」を舞踊家の皆様とつくる中で、ひとつの試みを提案しました。それは「身体表現の動的な時間と、撮影された瞬間的で静的な時間を共存させたらどうなるか?」ということです。結果、感光紙を使ったフォトグラムや電飾を身に纏った演技の長時間露光撮影は、動的な時間と静的な時間の架け橋になるような効果がありました。今後も異なる表現者との関わりを通して、お互いの表現に刺激を得られる機会になれば幸いです。(S.A.)

編集者のつぶやき...

- 建築のお寒い現状を愚痴っていたら窓の外も雪景色だった。(K.M.)
- シンプルにシンプルに。(M.N.)
- 最近はお金に興味があります。賞金、貯金、借金、税金、年金、交付金、助成金、投資金、寄付金など。(S.N.)
- 3歳の女の子が踊りを習いに来ました。彼女の一番の楽しみは、お稽古後の鬼ごっこです。(K.F.)
- SMFは魅力的なコラボレーションが生まれる場だと改めて実感しました。(S.A.)



▲「ムーブメントとフォトグラム(青の世界)」



▲電飾ムーブメントは何を語るか?